
君の世界

TOMATO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の世界

【Nコード】

N5699K

【作者名】

TOMATO

【あらすじ】

4月といえば入学式。

新しいスタートを踏み出した少女達のお話。

一人一人、背負っているものはたくさんある。

そんな中、本当の幸せを探していくストーリー。

（百合注意）

出会い

桜の花がまだ咲き始めたばかりの入学式。

天候は生憎の雨で・・・。

担任の先生はお姉ちゃんの元担任だった人。

知らない人だらけの教室。

ぶかぶかの制服。

無邪気にはしゃいでいる同級生の子達。

何もかもが新しい環境に包まれていた。

そんな入学式。

でも、私は怖くて怯えていて・・・誰とも関わろうとしませんでした。

浦田麻友^{うらだまゆ}。13歳の中学一年生。

いつも一人で自席に座ったままの少女が気になってた。

彼女はいつも本を読んでいるか、寝ているか。

みんなが楽しそうに話している休み時間でさえ、つまらなそうに窓の外を眺めていた。

とても可愛い顔の子で、髪は真っ黒なロングヘア。

男子を女子も彼女に近づきたがっていた。

でも、彼女は誰とも話しながらない子だった。
彼女の名前は花田未来。はなだみらい

いつも花田さんを遠くから見つめる日々が続きました。

そんな時、

「ん……えっと……浦田さん……だったっけ？」

不器用で戸惑った声が教室に響いた。

賑やかだった教室は彼女の声で静まり返った。

自分の名前を彼女が呼んでいる。頭の中にはそれだけだった。

「え、あ……うん！浦田です……けど……」

なんでだろう。

上手く言葉が出てこない。

やけに緊張する。

でも……嬉しかったのもなんでだろう？

「プリント……落ちてたから」

花田さんは笑顔を見せることすらなく、私にプリントを差し出した。
と、その瞬間。

男子達が一斉に自分のプリントをバラまく。

「花田さぁーん！俺もおっことしちゃったっ……！」

男子の止まらない『拾って』コール。

花田さんは意外と素直で優しい性格らしく、拾おうかどうか戸惑っていた。

まったく……可哀想じゃん。

そうは思っけど、女子より多数の男子を静まり返らせることは難しい。

すると、花田さんは床しゃがみこんでプリントを一枚ずつ拾い始めた。

「そんなこと、しなくていいじゃん」

気づけば声が出ていた。

「勝手に落としたんだからさ。ね？花田さん」
私がそういうと花田さんはじっと私を見つめた。
男子からは止まないブーイングの嵐だったけど、別にいつか。
花田さんは一応全部拾って一人の男子に手渡すと、私に柔らかな笑顔を向けて「ありがとう」と言った。

自分では思ってもみなかった。
自分だって女なのに。初めて心から女の子に可愛いと思えた。
それから…関係がおかしくなっていくなんて考えもなかった。

次の日。

身体力検査というものがあって、みんな体育着でクラスごとに学校内を行ったり来たりしていた。

身長、体重、座高、視力、聴力、体力……………。

様々な検査で、私は花田さんについていろいろ知れた気がした。

身長は145cmと小柄。体重だつて見るからに軽そう。

ただ意外だったのが、足がかなり速かった。

ま、ある意味で完璧な女の子。顔も可愛いし、小柄だし、足は速いし？

私といえばまあ、平均より少し上回る程度。

身長だつて165cm、大きいとはいわれるけどそこまでじゃない。

足は意外と速いって自分でなんとなく思える程度。

花田さんほど速くはなかった。

それからだ、花田さんはクラスの人気者になった。

誰にでも笑顔を見せれるぐらいに元気な子になって、誰と問わず仲良くしていた。

勿論、私も花田さんとはそんなに話さなかったけど好きだった。
どんな感情で好きだったと聞かれると…よくわからないが…。

いつか絶対仲良くなる。

よくわからないけど、そんな気がしていた。

そして、一月。

このクラスももう二ヶ月程度で終わりという時。

転入生がきた。

やまださやか

山田彩香という子。

これまた小柄な女の子。花田さんよりは大きいだろうけど……。
ショートカットで性格の強そうな瞳。

その子とは簡単に仲良くなれた。

花田さんよりも人懐こくて、足も速く、あっという間にクラスのムードメーカーになっていた。

私は彩香とすぐに仲良くなった。

同じ部活でバスケット部に入部して、いつでも一緒だった。

「麻友ううっツ！部活いつくよー」

彩香の明るい声とともに彩香が抱きついてくる。

「うしッ、いくぞ！」

私と彩香は似ているところが多かった。

周りから男扱いされてたし、いいペアとも言われていた。

その時だった。

花田さんがじゃれている私達の傍をとおりすがっていった。優しい香りがした。

相変わらず、花田さんは優等生で……完璧な存在。

手が届かなかった。

とおりすがって行っただと思ったのに。

彩香が明るく花田さんに声をかけたのだ。

「あーッ！！無視は無しだぞ！未来！！」

……………え？未来？

そつえば、花田さんの下の名前もちゃんと知らなかった。

未来っていうんだっけ？彩香は…なんで花田さんと仲良いんだろ？

考えがぐるぐると回る。

「あはははッ。ごめんごめん、無視したつもりはなかったんだけど」
花田さんの楽しそうな声が近くで聞こえる。

彩香は私から離れると花田さんに抱きついた。

「未来ー、今日は何時まで部活？待っててくれるかな？」

すごく、人懐こい彩香が羨ましく思えた。

届かない存在だと思っていた花田さんは、話しかければいつだってすぐ近くに居たんだ。

そう思うと、もっと早くから仲良くできたのに、と後悔していた。

「部活ねー、五時までだよ。でも今日は塾だからごめんねー」

花田さんは楽しそうに項垂れている彩香の頭を撫でていた。

その刹那。

花田さんと目があった。

こんなにまっすぐ見つめられたことはなかった。

花田さんはぺこりと私にお辞儀した。

いつの間にか背も伸びたみたいで150cmはあるだろう。彩香より大きかった。

「あ…、ども。えと……花田さん」

私がぎこちなく名前を呼ぶと、

「いいいいいよ。未来で」

花田さんは笑顔で答えてくれた。

どうしてだろう？

こんなに嬉しく思えたのは。

どうしてなんだろう？

恋情の交差

「浦田さんのことは…、やっぱり麻友ちゃんがいいのかなあ？」

私の目の前で、私の憧れの人が…笑顔で喋りかけてきている。嬉しくて、嬉しくて。

笑おうとも思ったわけではないのに、自然と笑みがこぼれた。

「いや、麻友でいい、寧ろ麻友でお願いしますッ」

気がつけば声もいつもより大きくなっていた。

「そう？じゃあ麻友ね」

いつだって見てきた、その彼女は私に今…私だけに笑顔を向けていた。

だけ…。

「もう行けば？未来」

冷たい彩香の声が聞こえた。

え…？なんでそんな言い方…。

問い詰める前に未来が苦笑しつつ返答した。

「うん、ごめんね。私生徒会の仕事もあるし…本当にごめんね」

「バイバイ」

嫌だ。もう少し話しててもいいじゃないか。

頭の中で自分勝手な感情が巡る。

なんで、彩香はあんなに冷たいんだろう…。

「あのさあッ！」

気持ちが先回りして、自分を突き動かしていた。

不思議そうに振り返る未来に近づき、初めて彼女に触れた。とは言っても、手を軽く掴んだだけ。

それでも、緊張はピークだった。

「メ…メールとかしてもいい……？」

乾ききった口から出る言葉。どうしても上手く喋れない。

未来はじつと私を見据えている。

しばらくして、またさっきまでの笑顔に戻り、

「じゃあ、彩香からアド聞いてもらってもいいかな？今メモ帳なくってさあ〜」

未来のまつたりとした口調がいつもどおりに流れる。

「あ…ありがとう……………／／」

「じゃあね！」

未来は、足早に去っていった。

頬が赤らんでいるのが自分でも感じられた。

その日の夜。

いつものように布団にダイブして、携帯を開く。

…アドレス。聞いてみるか。

ぱぱっと、彩香にメールを打った。

『未来のアド教えてくれない？』

単純な内容だった。

直ぐにでも返信は来るだろう。

そう思っで、少し目を閉じる…。

すると、案の定。手早く返信が来た。

『嫌だよ。教えない。私は……………麻友が好きなの。格好良くて、いつでも優しくて。抱きついたりしてもちゃんと受け止めてくれて。麻友が好き。だから未来には何も譲るつもりはないから。未来にどんなに辛い過去があつたからって、未来が泣いたって、私はわがまま言ううただけど誰にも麻友は渡したくないの』

「え…ッ。つ……………！？はあ…！！？」

思わず声を出していた。

な…、どういう話の転換ッ！？

急に告白なんて…それも女子から…。

「…ん？」

気になる言葉があつた。

”辛い過去”…？

彩香はどこまで未来を知ってるんだ？

よく考えると私はやっぱり彼女の何も知らなかった。

あんなに未来が好きなのに。どうしてなんだろう。

……………好き？

私が？未来を…？

何も考えずに出た言葉だった。

好きなのか、自分は未来のことを。

もう…、隠して自分を誤魔化すのはやめようか。

そうだ、おかしい愛情かもしれない。

でも…もう隠さない、逃げない、誤魔化さない。

私は未来が好き。

初めて見たあの時から、ずっと彼女だけを見ていたじゃないか。

まだ彼女のことは何も知らない。

彩香よりも。でも、これから知っていくことはできるんだ。きっと。

だから諦めない。

彩香が私のことを好きと言ってきても、揺らぎもしない。

これから、…いや、これからも彼女を見続けよう。

『ごめん。気持ちにこたえられそうにない。私は未来が好きだから。

嬉しかったよ、ありがとう。』

心からの、謝罪と、気持ち。

いつか未来を振り向かせる、そう自分に誓えた気がした。

想いの実

それから、寒い三月は過ぎ去り、彼女と出会ってから二度目の春がきた。

今はまだ彩香ともしギクシャクしていた。
大丈夫、いつか絶対また元通りになれる。
心には…その思いだけだった。

一方で、彼女……花田未来は相変わらず完璧な少女だった。
今は春休み真っ最中で、全然会えてないけど。
メアドも結局知れていないままだった。
一番気になる子がどうしているのか…知れない日々は本当に辛かった。

——と、その時。

握りしめていた携帯に聞き慣れたメールの着信音が鳴る。

「っと、誰かなあ」

ベットに寝転がっていた状態から、ゆっくりとした動作で私は起き上がる。

携帯を開いて着信画面を見ると見たことのないアドレス。
とにかくメールを開いて見てみると、

『お久しぶりです。春休み楽しいね』花田未来です。結構待ってたんだけど…メールくれるって言って一ヶ月も経ったので私からメールさせていただきました。急でごめんね？忙しかったら返信は別にいいよ。あ、メアドは彩香から聞いちゃった（笑）』

「…ッ！？み、未来ッ！？？」

嬉しくて声が詰まる程だった。

未来らしい優しい言葉がたくさん並べられたメール内容にしても。

彩香からアドレスを聞いたのか…。

なんだか、彩香に申し訳ない気持ちだった。

焦らすなんてことは考えられなかった。

とにかくすぐに返信した。

『メールごめんな；あ、急で悪いんだけど…今日って空いてるのかな？』

みえみえな質問だったけど気にしなかった。

未来に会いたい。休み中、一度でいいから。

頭にはそれだけだった。

未来からの返信は意外にも速いものだった。

『ごめん〜〜ッ。今日はこれから塾なの。明日なら空いてるよー』

『

少しガッカリしたが、明日。

それでも会えると思うと幸せだった。

『じゃ、明日遊ぼう？』

その後は遊ぶ約束をして、すぐにメールは終わりになってしまった。未来は意外と絵文字を使わない子だった。

顔文字だらけの文だったけど、随分と可愛いメールだった。

早く、明日にならないか。

ずっとそのことで待ち遠しくてそわそわしているのが自分でもわかった。

考えてみると、未来と学校以外で会うのも初めてだった。

ただ、まだ心の奥に引っかかるものがあった。

彩香の言っていた言葉。

”未来の辛い過去”

何があったのだろう。

どうして彩香は知っていたのだろうか…。

私にも話して欲しい。

そう、思っていた。

「麻友ー！ご飯はー？」

下の階から母親の声が聞こえた。

「今行くー！」

大きな声でそう返すと、カレンダーの明日に赤く丸をつけて私は階段を下りていった。

春の日々

七時の目覚ましで目が覚めた。

昨日はなかなか寝付けなかった。

だって今日は楽しみにしていた未来と遊ぶ日。

動物園がいいと言った彼女の意見を尊重して、場所は動物園に決まった。

服はいつもどおりのジーパンに黒い上着という、いかにも男のような格好だった。

別に変に着飾らないほうがいいだろう。

このほうが慣れているし。

そう思った結果だった。

十時に駅前で待っていると、彼女はやってきた。

髪は肩につくぐらいまでの短さになっていて、服装は意外にもスライトとかではなかった。

ショールパンに黒タイツ、上はゆったりとした長袖。

「おー…、おはよ」

どう声をかけていいかわからなかったがとりあえず挨拶をしておく。

「おはようッ！」

走ってきたのか。

切れ気味の息を落ち着かせながら笑顔の未来は言った。

この笑顔を見るのが楽しみだった。

自然と笑みがこぼれて、思わず彼女の頭をくしゃくしゃと撫でていた。

「…んー？」

不思議そうに私の顔を覗き込む彼女は…なんだかとても可愛らしかった。

「髪切ったんだ？」

なんとなくたずねてみると、
「うん！うつとおしかったからね」。また伸ばすけど、
いつもの笑顔で答えてくれた。

それからくだらない世間話をしていると、いつの間にか動物園は目の前だった。

「パンダ！パンダ居るかな？」

まだ園内にも入っていないのに未来はすごくはしゃいでいた。

「居るかね」

チケットを買って、急かす彼女とは裏腹に私はのんびりと彼女の後をついていった。

なんだか…、意外と幼い性格の持ち主のようだ。
時々、妹のように思える。

パンダを見つけると、未来は本当に嬉しそうに檻から眺めていた。
なんでパンダなんだろう…。

「パンダ、好きなの？」

そう聞くと、未来は返事の代わりにニツと笑って見せた。
好きなのか……。

少し考えてから、未来に「そこで待ってて」というと私はショップに入ってパンダのキーホルダーを買った。
きつと喜んでくれるはず…。

彼女の元に戻ると、何故だか未来はいなかった。

「…??」

不安になってあたりを見回していると、背後から何かに飛びつかれた。

一瞬。ほんの一瞬彩香が頭に浮かんできた。
だけど、それは未来だった。

驚いた私の表情を見て、未来は楽しそうに笑っていた。

「あはは。びつくりした??」

多分、悪戯が好きな子なんだろうなと、そう思った。

「別にびつくりしませんッ！大人をからかつちゃいけませんよ！」
笑ながら未来の頬をつねると、彼女はもつと楽しそうに笑っていた。

「大人って同じ年じゃないの〜！」

「見た目が違う！私は身長もあるしね〜」
意地悪で彼女にそういうと、

「私もう152cmだし！それなら彩香のほうが…でしょ？」

私は止まってしまった。

何もかもを見透かしたかのような彼女の瞳を見ることができなかった。

彩香が、浮かんできて消えなくなる。

私は、未来と彩香を同じように考えていたのかもしれない。

二人はまったく別の人物なのに。

「…あの……」

気がつけばまた、無意識に自分が声を発していた。

「ん？」

彼女は不思議そうに私を覗き込んできた。

言おうか。

すぐく、今でも悩んでいる。

だけど、言わなきゃ後悔する。

それは自分でもわかっていた。

言うしかない。

早いかもしれないが…今、言いたい。

私は、彼女の瞳をまっすぐに見据えると、

「好きです」

その一言を声に出した。

君が見ているもの

……時が止まったかのようだった……。

彼女は何も言わずに私を見ていた。

何もかもが、最初から、全て彼女にはわかっていたのではと思わせるような……そんな感じがした。

彼女が何も言ってくれないので、聞こえなかったのかと少し弱気になっていた。

すると、重い空気の中、彼女が口を開いた。

「どういう意味で？」

やっぱりか。

恋心とは、普通でも伝わりづらいモノ。

寧ろこんな関係で伝えるなんてやっぱり難しい。

今回は諦めようか、そう思ったときだった。

「私ね？麻友のこと全然知らない。でも、麻友が私を助けてくれたのはちゃんと覚えてる。去年の春。私、弱虫だったから人と接するの苦手で、怖くて、誰とも話したくなかった。そんな時だったよね。麻友のプリント拾って、麻友に助けてもらって……。本当に嬉しかったの。誰も信じれなかったけど、麻友なら仲良くなってくれるかなーって」

聞いている途中に涙が溢れそうになった。

彼女がそんな風に自分を見ていてくれていたなんて。

彼女の闇を少しでもいいから持ってあげたい。

一緒に歩んで行きたい。

心からそう思った。

「だけど、麻友人気者だったよね。私の手の届かないようなところにいつもいた。話しかけようと思うと、違う子達がすぐに麻友を取り囲んで…。麻友、楽しそうだったから見てて幸せだったよ。でもね？やっぱり近づきたかった。だから今すごく幸せ。ありがとう。変な愛の形なんだろうね。でも私も麻友好きだよ」

なんだ。

伝わってたじゃないか。

想い、ちゃんと。

友情なんかじゃない。

いけないことなんてなかった。

気がつけば、彼女を抱きしめていた。

小さな彼女は私の胸の中にスッポリと埋まっていた。

「…？麻友ーう？」

抱き締めたまま離したくなかった。

このまま一緒に居られれば…なんておかしい考えまでしていた。

「ごめん…嬉しすぎて…」

離れると、未来はいつもの笑顔で私を見ていた。

ねえ。

君は本当は誰をみていたのかな…？
きっと私じゃなかった。

そう、あの人が現れてから君は変わってしまったんだ。

その後、動物園を後にして未来と「またね」といいあった。
そう、こんな日が続く予定だった。

まだ始まったばかりだと、自分で安心しきっていたのかも知れない。

数日後。

春休みが明けて、クラス替え。

そして、彼女とあの人が出会ってしまったんだ。

あの人、名前順で出席番号が彼女の一つ前。

花田未来。彼女の前には、初瀬^{はせ}涙^{るい}という女子がきた。

身長は169cm。今の私よりは小さいだろうけど、キャラがかぶりすぎていた。

私は未来によく関わるようになった初瀬涙を古典的に嫌がった。

未来の楽しそうな話に初瀬涙が出てくることが許せなかった。

そして、私は、いつの間にか未来を束縛するようになってしまった。
いた。

未来を泣かせた日々が続いた。

自分でも止められなくなっていた。

この愛が、もうすぐに終わりを告げることになるんて…。
思いたくはなかったのに。

新しい声（前書き）

）花田未来 vision（

（ここからは花田未来目線となって物語は進んでいきます）

新しい声

「動物園で…好きですって…あはは……」

それとなく呟いてみる。

学校からの下校中。

もう中学二年生の夏を迎えようとしていた。

本当は悩んでいた。

別れようか、それとも。

縛られたままの生活は辛かった。

それに、私の背負っているものは大きくなるばかりだった。

麻友になら何でも相談できる気がしていた。

麻友なら私を助けてくれると思っていた。

だけど、麻友は、何も聞いてすらくれなかった。

もう私のこと嫌いなんじゃないかな。

だから最近怒るのかな？

一緒にいると、麻友が嫌な気持ちになっちゃうのかな。

それから。

私は少しずつ麻友を避け始めた。

そのほうが早く麻友が楽になれるよね。

麻友から「バイバイ」って言うてくれるよね。

そう思ってた行動だった。

それから、5ヶ月が過ぎた。

季節はもう秋だった。
冷たい風が吹き始めていた。

その頃。

私の心にも余裕が無くて、限界がきていた。

だから…麻友が引越すなんて、気づきもしなかった。

「転校するから。未来を縛り付けてる自分も嫌だから。バイバイ」
そう、私に直接告げた。

これでよかったのか。

去ってゆく麻友の背中に、声をかけることも叶わなかった。

麻友は転校して行った。

まだ、メールするぐらいの中ではあった。

『友達でいよう』

そう、麻友が言ってくれたから。

私といえば、不幸が続くに連れて周りから何もかもが劣っていった。
学校さえ、休みたいと願うようになった。

勉強も追いつかなくなっていた。

周りからの接し方はいつでも、劣っている私を憐れんでいるようにしか見えなかった。

逃げ出してしまいたい。この現実から。

甘いことを考えているんだろうな。

そうはわかっていたが、思いは止まらなかった。

そんな時、出席番号が一つ前のあの子は、私に心から接してくれていた気がした。

初瀬涙。身長も大きくて、私は涙と麻友を重ねてしまっていた。

「ね、未来」

休み時間中のこと。

「んー？」

私はいつものようにつまらなそうに窓の外を眺めながら曖昧に返事をした。

「へへ…可愛いーなー、大好き！」

…一瞬。その言葉に期待してしまった。

涙は普通の子。わかっていたつもりだった。

私もやっぱりおかしいのかなー…。

「うん、私も大好き」

こんな会話、日常茶飯事だった。

私と涙はいつもセットで、仲良くしていた。

このときはまだ、涙がどんな子か全然知らなかったから。辛いのが私だけなんて、勝手に勘違いしていたんだろうな。

涙はすごく、強い子だったと思う。

私みたいな弱虫と違って。

私はいつも、自分の出来なさを偽って生きてきた。

強い子といわれたって、誰かに縋りたかっただけ。

涙は、私が甘えることを唯一許してくれた存在でした。

私を傍に置いてくれました。

その頃から、私はもう、涙のことが好きだったのかな。

合わせ鏡

いつの間にか、季節は冬になっていました。

冷たい向かい風の中、私はいつものように学校へ向かう。
一緒に登校しているのは彩香。

彼女はいつものように私に笑顔を見せる。

…見ていて腹立たしかった。

彼女は過去に一度私の好きだった人にふられている。

何を考えているか、正直わからない。

怖い。

嫌いなのにそばにいるのだろうか。

そんなことが頭の中を駆け巡っていた。

「にしてもさ、また髪切ったよね。それなりに伸びたみたいだけ
さ」

彩香が突然私のことを話題に持ってきたので驚いた。

「あ、うん…。いろいろあつてさ。切りたくなつたの」

そう、麻友が離れてしまったから。

その日に自分で切った。

麻友が長いほうが好きって言ったから、伸ばそうと思っていた髪だ
った。

もう、意味…ないし。

大分短くなった髪をなんとなく触ってみる。
本当…肩にもつかないや。

少し寂しいけど、何も後悔はなかった。

学校に着くと、彩香が急に走り出した。

「涙ーッ っ っ」

見たくないものだった。

彩香はたまたま下駄箱に居た涙に抱きついたのだ。

……前と同じ。

麻友の時と。

私が堂々と彩香に何もいえないから、麻友も捕られそうになって悔しかったの。

もう、後悔しないように、しなくちゃ。

私が一言、何か言おうとした瞬間。

涙は彩香を自分から引き離れた。

「そーゆーの好きじゃない。ごめん」

涙らしくない、といえば類らしくない対応仕方。

彩香はまだ絡んでいつていたが、私は驚きで何もいえなかった。

涙は私を見ると、「おはよーさん」とにこやかに微笑んでくれた。

わからない。

涙が何を考えているのか、さっぱりだった。

でも、確かに、涙の対応が嬉しく思ってしまったのも事実だった。

涙は不思議な子だった。

何よりも、男の子らしくて、一人称が俺なのが特徴的だった。

そんな涙が、私と仲良くなるのはもうすぐのことでした。

私の世界

涙は本当に不思議だった。

何故か彩香を嫌がり、いつでも私についてきていた。

だけど、私は決めていました。

もう二度と、人を愛さない。

あの人で終わりにするの。

忘れたつもりではいたけど、いつも心の片隅には麻友が居た。

消さなくちゃ。

ずっと。そう考えて過ごしてきた。

なのに、あの方は今も私の中で：優しいあの方のままで残っていた。

大好き。

別れたく、なかった。

だからあの方で最後。

そう決めていた。

そんなある日の放課後のことだった。

運命の歯車は少しずつ壊れ始めていた。

委員会の仕事ですっかり外は暗くなっていた。

なんとなく。

帰る気がしなくて。

私は窓の外で涙が走っているのを見ていた。

涙は陸上部。

まだ部活の時だった。

走っている人を見るのが好き。
私も…部活ちゃんと選んだかったな。
そんなことを考えていた時。

ブルルルル。

携帯が鳴った。

彩香とか…そこらへん？

なんて考えながら、携帯を開く。

息が止まった。

嘘だ。絶対にありえない。

あの人からの電話。

震える手を必死に抑えながら電話に出た。

「…もしもし」

懐かしい声だった。

思わず涙がこぼれそうになる。

「麻友…？」

「うん…えっと…久しぶり。元気？」

もう、涙がこぼれていた。

止まらないくらいに。

私は今でもあの人が好き。きっとそう。

「うん…元気だよ…」

そして。

麻友から意外な言葉が出た。

「やり直したい」

「…え？」

時が止まったかのようにだった。

「…ごめん。急に。でも、やっぱり私未来が好きだよ」

嬉しかった。

だけど、戻れない。

それはわかっていた。

けど、確かに心は揺らいでいた。

私は、知らなかった。

その時、涙が遠くから私たちの会話を聞いていたなんて。

壊れいく関係

どう返事していいのか…。

すごく迷っていた。

寄りを戻すということは…簡単じゃない。

それに、私はもう恋はしない。

そんなことを考えて、返事を返さずにいた。
すると、不意に誰かに携帯を奪われた。

「…??は…!??」

振り返った瞬間、

息が止まった。

そこに居たのは、涙だった。

私の携帯をしっかりと握りしめている。

冷たい目。

涙は私に小声で「誰？」と聞いてきた。

「と…ッ。友達だよ…前にこの中学校だったんだけどね？転校しちゃっ…」

私がしゃべり続けると涙は無言で私の口を封じた。

何をするつもりなんだろう…。

涙は私の携帯を耳に当てると、「もしもし」といつもの低い声を出した。

何のやり取りをしているのかは全然聞こえなかった。

ただ、涙は、「ふうん」「そう」「で？」など、繰り返しているだけだった。

麻友は何を話しているのだろう…。

そして、しばらくして涙は電話を切った。

「…元カノ…っていうのかな？」

私の顔を、見透かした目で覗き込む。

何も言えず、頷くことしかできなかった。

「寂しいの？」

気がつけば。

私は大きな涙に包まれていた。

涙は優しい口調で私の頭を撫でている。

…懐かしい、感じがした。

そんな時に限って、だ。

さっきの麻友の声が頭から消えない。

『やり直そう』

その一言が、私の胸を駆け巡る。

…嬉しい、けど…。

私はそつと涙から離れた。

「ごめんね」

耐え切れなくなって泣き出す私を涙は優しく撫でた。

「よしよし。元気出せ？な。俺そろそろ部活戻る。ごめんな、ええつと…その…話聞いてた。ごめん。」

それだけ言い残すと、涙は教室から出て行ってしまった。

…やっぱり。

聞いてたよね。

私、どうしたらいいんだろう。

涙も、麻友も大好き。

あれ…。

まだ。私、涙のことも好きなんだ。
どうしたら…いいのかな。

一人残された教室には、私の泣く嗚咽だけがこぼれていた。

一人と考える

あれから、月日が流れた。

中学にあがってから三度目の春。

相変わらず私は優柔不断で、何も決められていないままだった。

麻友からはあれつきり。

連絡はなかった。

涙はいつも彩香と一緒に居た。

私は、一人。

考え事をするだけ。

そんな時、三年生になったというのに転入生がくるという噂が流れた。

まだ春休み最中だった。

宿題を進めているとメールの着信音が流れた。

「…誰だろ」

あまり気にならなかったけど、一応確認。

すると…、送信者は涙だった。

意外だな～と思いつつ内容を見る。

『転入生。本当らしいよ？』

ふうん。

軽い気持ちで、

『誰ー??』

と送り返す。

返信は早くて、何よりも衝撃が強いものだった。

『浦田麻友』

絵文字も顔文字も何もないメールだった。

麻友が…戻ってくる…？

身震いした。

怖いなんてものじゃなくて。

不思議な感情が自分の中で交差していた。

どうしていいのか、本当にわからない。

涙に返信する気も起きなくて、メールはそこで途切れた。

私は、何がしたいのだろう。

麻友のことを思うと胸が苦しい。

涙と話していると、不思議と落ち着く。

寄りを戻す。

それは不可能な相談だ。

そうだ。

だって私は明るい麻友が大好きだったけど。

けど、もう違う。

私が好きなのは、

きつと、そう。

私が好きなのは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5699k/>

君の世界

2010年12月8日12時59分発行